

トマト黄化葉巻病の防除に有効な育苗期における茎葉散布剤					
[要約] スタークル顆粒水溶剤及びベストガード水溶剤は <u>トマト黄化葉巻病</u> に対する感染抑制効果が高く、 <u>トマトの幼苗への薬害がないため、育苗期の茎葉散布剤</u> として有効である。					
担当部署	病害虫部・虫害チーム			連絡先	092-924-2938
対象作目	野菜	専門項目	病害虫	成果分類	新技術

[背景・ねらい]

シルバーリーフコナジラミが媒介するトマト黄化葉巻病は、早い時期に感染するほどトマトへの被害が大きいため、育苗期からの効率的な防除が重要である。しかし、幼苗期は薬剤によっては薬害を生じる懸念がある。そこで、トマトのシルバーリーフコナジラミに登録のある薬剤の感染抑制効果と幼苗に対する薬害を明らかにし、育苗期におけるトマト黄化葉巻病の防除法を確立する。

(要望機関名：病害虫防除所(H12))

[成果の内容・特徴]

1. スタークル顆粒水溶剤及びベストガード水溶剤は幼苗(2.5葉期)でのトマト黄化葉巻病に対する感染抑制効果が比較的高い(表1)。これらの薬剤を中心に育苗期の防除体系を組み立てる。
2. ハチハチ乳剤とサンマイトフロアブルは幼苗への散布により、葉が黄化し内側に巻く薬害を生じ、生育が抑制される(表2)。両剤とも芯止まりには至らないが、生育抑制が著しいため幼苗期には使用できない。
3. ハチハチ乳剤、サンマイトフロアブル以外の薬剤は、幼苗期に処理しても薬害は認められない(表2)。

[成果の活用面・留意点]

1. 育苗期におけるトマト黄化葉巻病に対する防除に活用できる。
2. 多発生条件下では茎葉散布剤だけでは感染抑制効果が不十分なので、育苗期の使用に登録があるアドマイヤー1粒剤やベストガード粒剤を併用する。

[ 具体的データ ]

表1 トマト黄化葉巻病に対する散布剤の感染抑制効果

供 試 薬 剤	処 理 濃 度	感 染 株 率 ( % )
スタークル顆粒水溶剤	3000倍	40.0
ベストガード水溶剤	2000倍	40.0
ダントツ水溶剤	2000倍	50.0
モスピラン水溶剤	2000倍	60.0
バリアード顆粒水和剤	4000倍	70.0
アドマイヤー水和剤	2000倍	70.0
チェス水和剤	3000倍	70.0
アディオオン乳剤	2000倍	80.0
トレボン乳剤	1000倍	80.0
サンマイトフロアブル	1000倍	50.0
無 散 布	-	90.0

注) 処理 5日後に、薬剤につき10株を陽光定温器 (25 ) にラテン方格で配置し、中央部に保毒虫の寄生したトマト株を 2日間置いた。接種終了後、供試株は寄生した保毒虫を計数・除去し、陽光定温器に戻し、3週間維持した。

表2 トマト幼苗 (2.5葉期) の生育に及ぼす各種薬剤の影響

供 試 薬 剤	処理量・ 倍数	薬害の 有 無	芯止ま り率 ( % )	第 3 葉 の長さ (cm)
スタークル顆粒水溶剤	3000倍	-	0	11.1
ベストガード水溶剤	2000倍	-	0	11.5
ダントツ水溶剤	2000倍	-	0	11.6
モスピラン水溶剤	2000倍	-	0	12.1
バリアード顆粒水和剤	4000倍	-	0	11.5
アドマイヤー水和剤	2000倍	-	0	11.8
チェス水和剤	3000倍	-	0	11.7
アディオオン乳剤	2000倍	-	0	10.7
トレボン乳剤	1000倍	-	0	11.0
ベストガード粒剤	1 g/株	-	0	10.5
アドマイヤー粒剤	1 g/株	-	0	11.9
サンマイトフロアブル	1000倍	+	0	9.8
ハチハチ乳剤	1000倍	+	0	9.2
無 散 布	-	-	0	11.3

注) 1. 品種は " ハウス桃太郎 " を供試した。  
2. ハチハチ乳剤を散布した全ての株で 1~ 4葉の展開が小さく黄化し、1~ 2葉が内側に巻く薬害を生じた。サンマイトフロアブルを散布した全ての株で 3~ 4葉の展開が小さく黄化する薬害を生じた。

[ その他 ]

研究課題名：媒介虫の防除によるトマト黄化葉巻病の感染防止技術の開発

予 算 区 分：国庫 ( 先端技術地域実用化 )

研 究 期 間：平成15年度 ( 平成13~ 15年 )

研究担当者：嶽本弘之、山村裕一郎